

## 青少年と交流・体験活動

青少年教育を担う行政・教育担当者としては、青少年の課題を捉えつつ、青少年の持つ大きな可能性を信じ、一人ひとりの興味、関心、能力や課題に応じた成長と大きな飛躍を達成できるようにたくさんの体験を設定することが大切である。そして、彼らがその体験を通して明日の社会を担う社会人に育っていき、次に続く世代に成長と飛躍を引き継ぐといった持続可能な発展を考えて行きたいものである。

### (1) 青少年の課題

平成19年1月の中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」において、「青少年期を大人への準備期間として、・・・自己の可能性を伸展させる時期とするとともに、自らの人生をどう設計していくかについて考える時期とする必要がある。・・・目標の達成等へ向かって意欲を持つことが、成長のための行動の原動力となるのであり、青少年期には特に、このような意欲を持って生き生きと充実した生活を送ることが重要である。」と指摘している。しかし、青少年期に「学習」「人間関係」「健康・スポーツ」などを含め「生きること」への意欲が高い者もいれば、非常に低い者も多いという二極化が指摘される中、同答申では青少年の意欲をめぐる現状と課題について研究成果に基づく整理を行い、青少年の意欲を高め、心と身体の伴った成長を促すために重視すべき視点と具体的方策について、五つの提言を行った。ここでは、この答申を中心に青少年の課題を概観する。

#### ア 生活の夜型化、朝食欠食などの基本的生活習慣の乱れ

基本的生活習慣が乱れている指摘が多いが、食事、睡眠、運動という健康を育む三原則が単独で乱れているわけではなく、それぞれが関連して不健康の連鎖がつながっている。図2は中学2年生の就寝時刻を示しているが、「夜更かし」「夜食を食べる」「朝起きられない」「朝ゆっくりできない、手伝いをしない」「午前中に倦怠感」「運動不足」「身体的疲労少」「寝られない」「夜更かし」「夜食」・・・このような身体的な不健康が学習や運動スポーツなどへの意欲低下につながる原因の1つであると考えられる。

図2 24時以降に就寝する中学2年生の割合

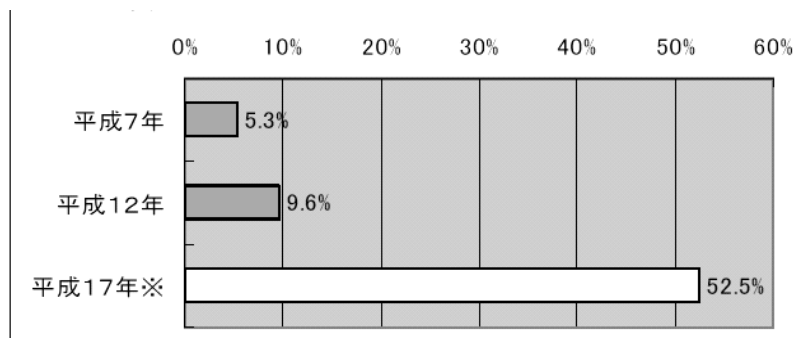


図3 「朝食欠食」と「からだのだるさ」の関係

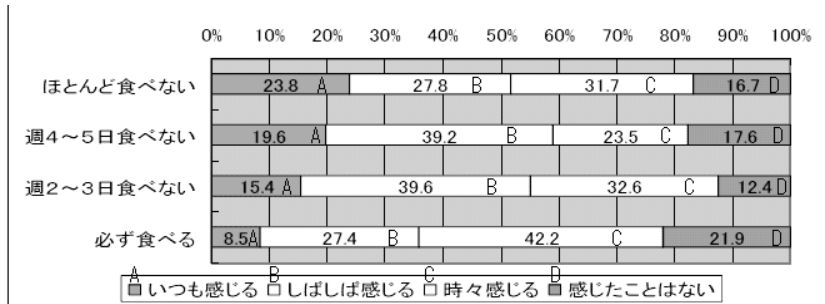


図2、図3の資料元について

平成7年、平成12年については日本体育・学校健康センター『平成12年度児童生徒の食生活等実態調査』、平成17年については文部科学省『義務教育に関する意識調査』（平成17年）

出典：中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」2007年

### イ 希薄な対人関係

他人とのコミュニケーション能力の低下が指摘されているが、そこには、子育てに無関心な親の場合と、親が子どもに過剰な関与をするといった家庭の教育力の問題がある。もう一つには、学校外での活動の減少から青少年が地域との接点が少なくなり、大人も青少年もお互いに地域であいさつをすることが少なくなっている。地域で見守られ、注意されることで知らず知らずのうちに気心が知れた中になり、道徳心や正義感が育まれるといった地域の教育力が低下している。さらに同じクラスの中でもごく小さな集団とだけであそぶといういろいろな仲間と交流する体験の少なさも指摘されている。

こうして、他人と一緒に活動する中で、相手に共感する、一緒につくる、協力する、自分の考えを言う、相手の言うことを聞くという基本的な経験を経ずに思春期を迎え、「キレる」「ひきこもる」などが増えるのはコミュニケーション能力の問題が原因の1つと言えよう。

### ウ 直接体験の少なさ

運動やスポーツなど身体を動かす体験、自然体験が少なくなっており、それによる青少年への影響が指摘されている。子どものあそびの質が変化しているのは、子ども社会における「空間」「時間」「仲間」といった「3間の不足」、交通事故や犯罪に巻き込まれないように等の安全への意識向上により、外での集団あそびが少なくなり、テレビゲームやポータブルゲームなどに代表される1人あるいはごく少人数で成立する室内あそびがあそびの主流となっているからである。このためスポーツ等の体を動かす体験も少なくなり、運動不足と肥満傾向の子どもが増えていることが指摘されている。

また、自然体験も減少しており、平成10年に生活体験や自然体験活動が豊富な子どもほど「道徳感」「正義感」が豊かであるという報告がなされ、身近な自然の環境調査や省エネルギー活動などの環境教育といった自然体験活動事業が質・量とも発展した。しかし、平成17年の調査によると子どもの自然体験活動が減少している結果が明らかになり、都

会に住む子どもも自然が豊かな山村に住む子どもも同じ結果であるとも報告されている。

図4 夏休みにおける自然体験活動への参加割合

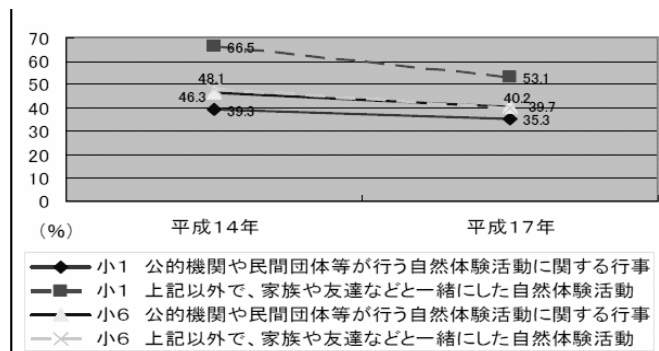
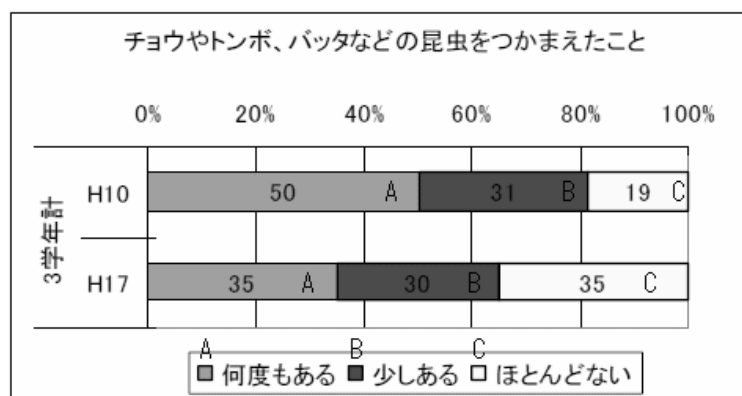


図5 自然体験について平成10年と17年の比較



資料元：国立青少年教育振興機構『「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」報告書平成17年度調査』、2006

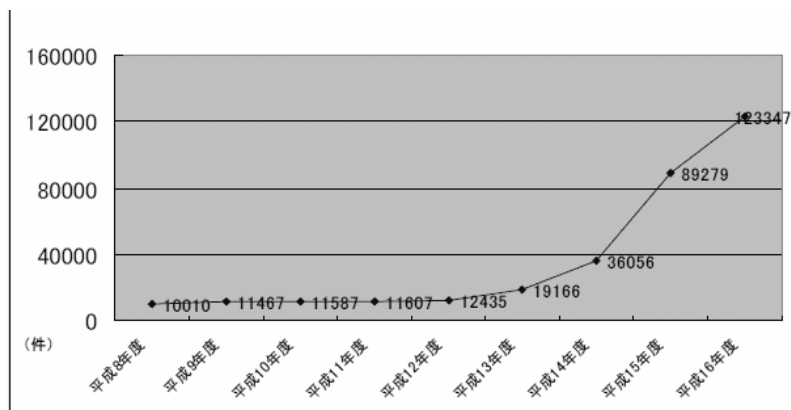
出典：前掲中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」2007

## エ 情報メディアの急速な普及に伴う問題

社会の情報化の進展に伴い、経済が発展し生活が便利になっているが、人間の生活様式が変化した結果、運動不足の人間が増加しメタボリックシンドロームに代表される新たな問題が起こっている。青少年の情報化に伴う問題としては情報メディア利用に伴う犯罪に巻き込まれる可能性が増えたということが挙げられる。内閣府の調査によると青少年のインターネットの利用状況について、パソコンのインターネットについては小学生58.3%、中学生68.7%、高校生74.5%、携帯電話等のインターネットについては小学生27.0%、中学生56.3%、高校生95.5%となっている。

このような情報メディアを利用したバーチャルコミュニケーションの急速な普及が、青少年の脳の発達に重大な影響を及ぼす危険性があるという指摘がある他、有料サイトへの過剰アクセスによる利用料支払いに起因するトラブルや事件、掲示板サイトによる書き込みによるトラブルなど多くの犯罪に絡む問題が起きていることが指摘されている。

図6 未成年を当事者とする消費生活相談件数（うち9割が情報メディアに係るもの）



資料元：独立行政法人 国民生活センター

出典：前掲中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」

## (2) 青少年を対象とした教育のねらい

上記(1)青少年の課題で記述したことを踏まえ、青少年を対象とした教育のねらいとして留意すべき点は、平成20年に改訂された小・中学校の学習指導要領でも引き続き重要視されている「生きる力」を育むことである。

### <生きる力>

- ・基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力。
- ・自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性。
- ・たくましく生きるための健康や体力。

「生きる力」とは平成8年の第15期中央教育審議会第一次答申からこれからの教育において重要であると指摘されていることであるが今回の学習指導要領改正における「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」においても「生きる力」の理念がさらに重要視されると述べられている。

つまり、青少年の教育として重要であるのはこの「生きる力」を育むことであり、この「生きる力」こそ、青少年の学習活動、他人とのコミュニケーション、体験活動などについての意欲を育むことである。具体的に青少年への教育として重要な事項は以下のとおりであると考えられる。

### ア 思考力、判断力、表現力の育成

直接体験をとおして、基礎的・基本的な知識の習得を図り、実際の生活で活用する思考力や判断力を育成することができる。また体験から学んだこと、感じたことを発表させることで、自らの活動に対する理解がさらに深まり、その成果を学習者間で共有することも可能となる。

### イ 自主性、社会性、共感する力

自ら課題を見つけ、自分の考えや意見を他人に伝え、課題解決のために他人と話し合い、協力することでより合理的な解決と新たな発見が起こる。グループで課題解決を行うことにより他人の考えや行動を理解する、わかり合うという共感する力を育むことができる。

### ウ 生活習慣、健康と体力

集団で行う共同生活体験により、家庭や自分自身だけでは身につけにくい基本的な生活習慣、自分自身や周囲への健康増進への行動、身体を動かすことの楽しさや爽快感などを感じることで、心身の健康を育成し考える機会とする。

### エ 地域を愛し、地域と共に生きるこころ、道徳心

家庭という最小単位に始まり、スポーツクラブ、学校などいろいろな団体に人間は所属するが、地域に生きる一人の市民として責任ある行動と貢献が青少年には求められる。地域の問題を自分の問題と捉え、地域社会をつくることへ参画することでいわゆるシティズンシップ(Citizenship：共同社会における市民性)の意識、道徳心を高めることができる。

## (3) 交流・体験活動の目的と分類

---

青少年への教育としての目的を達成する上で、交流・体験活動は、直接的に事象に触れ、他人と意見交換や触れ合い、その場で判断しながら活動するので大変有効な手段の1つである。教育基本法、学校教育法の改正によりボランティア活動など社会体験や自然体験活動を充実させることが求められており、さらに工夫と効果的な事例が実施されている。

また、交流・体験活動は非常に幅広く多種多様であり、平成15年に文部科学省でまとめられた「体験活動事例集」では「体験」という言葉からウェビング(Webbing)により整理されている。(12ページ図7参照)

以上の概観と教育的効果を考え、今回このハンドブックで取り上げる子どもを対象としたアクティビティ(交流・体験活動)の分類は、「ア 自然と触れあい、自然の理解を深めるアクティビティ(交流・体験活動)」「イ 人間関係を促進するアクティビティ」「ウ 異世代交流、地域間交流を進めるアクティビティ」「エ 活動エリアの地域文化を知るアクティビティ」「オ 身体的に困難な課題にチャレンジするアクティビティ」である。なお、「アクティビティ」という語句については、(1)「交流・体験活動の企画」(13ページ)で詳しく記述する。

5つアクティビティ具体的な内容とねらいについては以下のとおりである。

#### **ア 自然と触れあい、自然の理解を深めるアクティビティ**

自然の中で、自然と触れあい、自然環境の理解を深める野外で行う運動スポーツ的な活動、野外生活体験、環境教育的活動などである。活動のために遠くの自然で新たな発見をすることも効果的であり、その体験を自分の身近な自然と比較したり、そこで感じたことを日常の生活に活かすことが重要である。

例)自然(植物、動物、河川、海浜、岩石、天候等)を生かした探求活動

### **イ 人間関係を促進するアクティビティ**

希薄な人間関係に対応し、知らないもの同士が共同で何かを創ったり、課題を解決することで新たな人間関係が生まれ、他人を知ることで自分自身の理解を深めることができる。アイスブレイク(氷を壊す、溶かす)という名称でこころと身体の緊張を解きほぐす活動が実施されることが多い。また、障がいを持つ人、外国の人々等との交流体験事業も効果的である。

例) 誰でも参加できるユニバーサルキャンプ、海外間(地域間)交流事業

### **ウ 異世代交流、地域間交流を進めるアクティビティ**

核家族化、都市化による地域での活動が少なくなった今、自分自身の世代と親を越える世代と一緒に生活することが少なくなっている。高齢者との交流により高齢者から学び、高齢者の活動を支援することにより、豊かな人間性や新たな価値観を育むことが期待できる。また、市町村合併が進み、同じ市内で地理的条件や文化に違いのある地域が存在する同市内の地域間交流や、河川の上流と下流などの交流事業などが行われている。

例) 街道を歩いて移動しながら自然と文化の発見活動、地域子ども会交流キャンプ

### **エ 活動エリアの地域文化を知るアクティビティ**

自分の住む地域に存在する生活技能体験、伝承芸能、ものづくり、産業体験などをおして自分の住むまちの歴史や文化を知り、まちづくりに興味をもち実際に提案できる気持ちと態度を育む。

例) 地域にある特産物や産業を見学し体験する、伝統的に伝わる祭りを調べ参加する

### **オ 身体的に困難な課題にチャレンジするアクティビティ**

自分自身とグループで協力し困難に挑戦し、成し遂げることで自分自身に対して自信を持ち未来への可能性、あきらめない気持ちを育み、仲間と協力することのすばらしさ、偉大さを感じる。

例) M T B や徒歩による長期遠征、クライミング、沢登り、カヌーなど非日常的体験

## **( 4 ) 交流・体験活動の教育的効果**

---

### **ア 交流・体験活動を効果的に進める視点**

交流・体験活動を効果的に進めるにあたって重要なのは、次の4点である。

#### **対象者理解**

対象者とは参加者であるが、参加者の年齢的な発達段階を踏まえた身体的活動と精神的なケアを行うことである。また、参加者の経験とパーソナリティを一人ひとり考えた進捗が大切である。

#### **運営担当者の企画への熱意**

章で詳しく記述するが、担当者自身の熱意が感じられない事業で教育的効果を期待する方が難しい。

#### **いろいろな団体との連携と優秀な指導者養成**

行政機関や民間団体を含めて1つの団体だけで大きな教育的効果を上げることは難しい。

活動によっては専門家から指導をしてもらった方がより安全で参加者の技術も上達することがある。その上達やできたということが参加者の満足につながる。

十分なりスクマナジメント（安全管理）

もとより安全は何にもまして最も留意しなければならない。どんなに念入りに準備を行い、良い活動と素晴らしい指導者を用意しても、ケガ1つですべてが無に終わることがある。

### イ 交流・体験活動を効果的である理由

交流・体験活動を実施すれば子どもの成長に効果があるというものではない。では、なぜ交流・体験活動が効果的であるのか。それについては、多くの研究成果と指導者の専門的見地により以下の点が挙げられる。

他者との積極的なコミュニケーションが行われる。

自然や地域との直接的な触れ合いがある。

「創造」「工夫」の場が存在する。

「困難を克服する」「挑戦する」体験が存在する。

「今、ここ」で判断、決断し物事を進めなければならない状況が存在する。

人間関係のトラブルも活動の継続と指導者の支援で解決できる。

指導者のもとに交流・体験活動で起こった個人やグループの心の動き、葛藤、感じていたことと実際行動の違いなどについてふりかえりを行うことができる。

### ウ 交流・体験活動の教育的効果

青少年の課題を踏まえ、担当者が熱意を持って企画した交流・体験活動の事業を上記の課題を各活動に準備していき、このハンドブックの創りあげていく留意点をチェックしていけば次に挙げる教育的効果が期待できるであろう。

物事に挑戦しようという気持ち、挑戦しようというやる気が向上する。

自分にもできそうだ、きっとできるという自信がつく。

友だちができやすくなる。他人に対して共感する能力が向上する。

物事を自分で判断できるようになる。

自分自身のことがよくわかり、他人のことも尊重できるようになる。

自然環境への理解と気づきが増す。

### 引用・参考文献

・文部科学省、「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」（答申）

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07020115.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07020115.htm)

・文部科学省初等中等教育局、「体験活動事例集 豊かな体験活動の推進のために」ぎょうせい、2003

・内閣府、「平成20年版 青少年白書」

<http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/hakusho.html>

図7 ウェビングで考える体験活動（「体験活動事例集より」）

